

受付番号	受付日	20 年 月 日	決定日	20 年 月 日	決定
------	-----	----------	-----	----------	----

ールは飲まないように。【Acknowledge】(共通)職場が変わることによる精神的・肉体的に疲れる、(相違)薬には限界がある。【Recommend】自分に合った職場が大切です。相談できる方を探しましょう。【Negotiate】先ず、首痛を和らげましょう。そして、自分にあった職場を職安・市の支所などに相談しながら焦らず、見つけて行きましょう。“

Day14「首が痛いので、娘が知っている整体に行きます(再就職先の退職。笑顔が見られる)」
(消化器症状改善 → 以前からの首痛が主訴) 地域連携会議へ情報報告。

Day29「首を治し、仕事を見つけようと思っています。(生活意欲の改善)」・・・職場斡旋有り

Day63「今度の仕事は、リストラになった前職場に近いので、良いです。」(再就職あり)

3. プライマリ・ケアに関する考察

症候の訴え(“事実”)がある時、私たちは、その原因(“真実”)を、I：病態変化(進行)、II：薬剤の作用(薬剤固有の作用、基礎疾患に対する薬剤作用、薬物相互作用、臓器機能の変化、固有の遺伝子)、III：生活活動による副次的作用である病い(illness)、IV：原因不明の区分に求め、ケアの方向性を探ることになる。

本事例は、健康格差³⁾と言われる心理的・社会的影響であるSDHの社会格差・ストレス・失業が消化器症状の病いを誘因している可能性が大きかったため、III.生活活動による副次的作用の”真実”に向き合い、「患者中心の医療」⁴⁾「適正な薬物治療環境」の実現に向けて生物心理社会モデル(BPS)⁵⁾と共にLEARNのアプローチ⁶⁾を行っている。BPSでは、社会(S)：所得・年齢・社会構造(効率化)・地域とのつながり、心理(P)：ストレス(失業、仕事への適応力)・自念慮の経験、生物(B)：下痢・胃部不快感・不眠・飲酒となったことから、【経過】で示した通りのLEARNのアプローチを行った。結果は、症候の寛解までとは至らなかったが、患者の表情の改善・消化器症状の軽減、更に、再就職の支えと繋がったことから、患者中心の医療と地域のかかりつけ薬局の具現化を示すことができ、薬局として意義深い一歩と考えられる。ただ、OTC購入患者が抱える社会経験に基づいた背景は様々であり、症候の訴え(“事実”)からその原因(“真実”)を正しく探り、常に向き合う中でOTCを販売することが重要である。換言すれば、先ず、生活者であるすべての患者を、SDHが病いを誘発し、症候の緩和目的で来局されたと想定した上で、“事実”に偏って患者を限られた時間の中で生物医学モデル⁷⁾(BM：病気があると特定の病因が発症させているという直線的な因果関係)のフレームの中に画一的に当てはめるのではなく、生活の中の“真実”を捉える「患者中心の医療」を根幹としたBPS(生物医学的側面に加えて患者の心理学側面、患者を取り巻く社会的側面の様々な要因が影響している)を考慮したOTC販売をすべきであると考えている。

一方、SDHは公共政策(社会、国のあり方)に依存しているため、薬局のみでは限界があるため、包括的な健康支援として医療機関、行政、職場、地域社会との連携も必要であり、その構築に向けた更なる取り組みが必要であるとも考えている。

症例からの学びを今後へ

OTC購入のため来局される患者にはSDHを抱え、不安の中で病いの改善という希望を持たれている方も存在している。そのような患者を鑑みると、ファーストアクセスとしての薬局への期待と責任は大きいと改めて感じる事となった。

本事例は、薬剤師としての患者中心の医療の方法であり、薬局の責任と在り方を問うものであった。今後も地域住民が抱えるSDHを評価し、ケアにあたることで、プライマリ・ケア薬剤師として、患者の健康支援(近接性・包括性・協調性・継続性・責任性)に広く関わって行きたい。

参考文献

- 1) Richard Wilkinson, Michel Marmot (高野健人監修・監訳)：健康の社会的決定要因 確かなる事実の探求 第2版. NPO 健康都市推進会議.
- 2) 健康日本21(第三次). 厚生労働省. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippon21_00006.html ((令和5年6月20日アクセス).
- 3) 近藤克則：健康格差社会第2版. 東京. 医学書院. 2022.
- 4) Moira Stewart et al. 葛西龍樹監訳：患者中心の医療の方法 原著第3版. 羊土社. 東京. 2021.
- 5) Engel GL: The need for medical model: A challenge for biomedicine Science. 196(4286): 129-136. 1977.
- 6) ELOIS ANN BERLIN et al: A Teaching Framework for Cross-cultural Health Care. THE WESTERN JOURNAL OF MEDICINE. 1983 Dec. 139(6): 934-938.
- 7) 日本プライマリ・ケア連合学会編：基本研修ハンドブック改訂3版. 南山堂. 東京. 2021.